375.9
Mo14
資料室

文部省著作

尋常小學讀本 七

發行所 日本書籍株式會社

41343
教科書文庫
4
810
31-1904
20000
18408

資料室
375.9
M014

文部省著作

尋常小學讀本 七

發行所 日本書籍株式會社

廣島大學圖書之印

もくろく。

第一　春の遊。……一
第二　四季。……二
第三　なまけもの。……四
第四　三つのちょーちょ。……八
第五　茶。……十三
第六　日本の景色。(一)……十五
第七　日本の景色。(二)……十八
第八　公園。……二十四
第九　かはいさうな女の子。二十八
第十　人ノカラダ。……三十一
第十一　煙草と酒。……三十五
第十二　石と豆。……三十八
第十三　鳥ノ巣。……四十三
第十四　停車場。……四十五
第十五　貿易。……五十
第十六　開港場。……五十二
第十七　神戸からの電報。……五十五
第十八　航海の話。(一)……六十一
第十九　航海の話。(二)……六十七
第二十　燈臺。……七十三
第二十一　琉球。……七十四
第二十二　寒暖計。……七十六
第二十三　小太郎の日記。……八十二

18408
廣島大學教図書
18408
18408

廣島大學圖書之印

桃　櫻

第一　春の遊。

お庭に、桃がきいてゐる。
お庭のきで、
女の子どもがまりつきあそび。
まりをつく音、ぽん、ぽん、ぽん。
かずをよむこゑ、ひー、ふー、みー」。
小山に櫻がきいてゐる。
小山の上で、
男の子どもがへいたいあそび。

らっぱふく音、とて、ちて、たー。
かけるごーれい、一、二、三。」
野原に、すみれがきいてゐる。
野原の中で、
みんなが、いっしょに、おにごとあそび。
おにをきめるよ。「じゃん、けん、ぽん。」
せなかたたくよ。とん、とん、とん。」

第二　四季。

日、カサナリテ、月トナリ、月、カサナリテ、年トナ

ル。一年ハ十二箇月ナリ。一年ヲ、春、夏、秋、冬ノ四季ニ、分ツ。
三月ノハジメヨリ五月ノヲハリマデヲ春トイヒ、六月ノハジメヨリ八月ノヲハリマデヲ夏トイフ。九月ノハジメヨリ十一月ノヲハリマデヲ秋トイヒ、十二月ノハジメヨリアクル年ノ二月ノヲハリマデヲ冬トイフ。
春ハ、暖ニシテ、花サキ、夏ハ、暑クシテ、草木シゲル。秋ハ、涼シクシテ、稲ミノリ、冬ハ、寒クシテ、

雪フル。

カクテ、冬ヲハレバ、マタ、春トナル。春ハ、四季ノウチ、モットモ、タノシキトキナリ。

第三　なまけもの。

二人（ふたり）の子どもが、通の四つかどで、であった。それは、學校へ、行く通と、野原へ、行く通との四つかどであった。

秋山「春野君。おはやう」。

春野「秋山君。おはやう」。

秋山「君。どこへ、行くのか」。

春野「學校へ、行くのだ」。

秋山「學校へ、行くのか。あの、おもしろくない學校へ、行くのか。來たまへ。野原へ、行かう。野原には、ちょーちょがまってゐて、すみれやたんぽぽがさいてゐて、それはおもしろいよ。來たまへ。いっしょに、行かう」。

春野「學校がひけてからなら、いっしょに、行かう。」

秋山「君は、どうしても、學校へ、行くのか。それでは、行きたまへ。ぼくは、野原へ、行くから。」

こんなことがあってから、もう、二十年ほど、たった。二人の子どもは、もう、おとなになった。

ある、寒い日のことであった、顔色のわるい、きたない着物を着た男が、りっぱな家の戸口に、立ってゐた。そして、しきりに、「どうぞ、お助けください。寒くてなりません。ひもじくてなりません。どうぞ、お助けください。」といってゐた。

すると、うちから、顔色のよい、きれいな着物をきた主人が出て來た。そして、たいそー、ふしぎさうな顔をして、穴のあくほど、その男の顔を見た。

主人「君は、秋山君ではないか。」

男「さよーでございます。秋山でございます。」

主人「やー。秋山君でしたか。さぞ、寒いでせう。さー。はいりたまへ。」

ふたりは、うちに、はいった。男は、まだ、主人がたれであるか知らなかった。みなさんは知ってゐますか。

第四　三つのちょーちょ

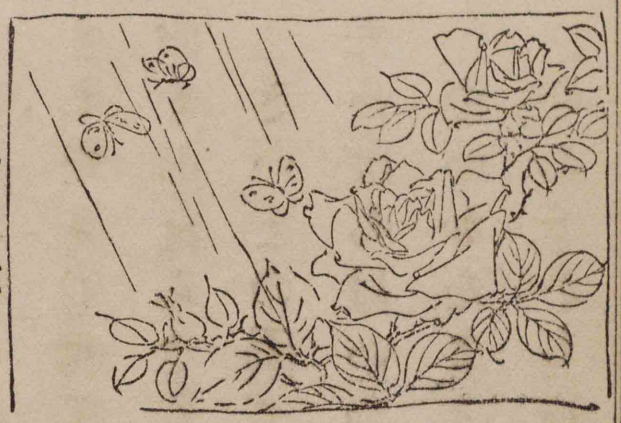
赤、白、きいろの三つのちょーちょがありました。ある、暖い日に、野原で、おもしろく、遊んでゐました。花から花へ、ひらひらと、まってゐました。ところへ、にはかに、雨がふってきました。ちょーちょは、うろたへて、うちに、歸りました。歸りました

が、戸がしまってゐました。かぎもみつかりませんでした。羽は、だんだん、ぬれてきます。ちょーちょは、こまって、赤いばらのうちをたづねました。そして、いひました。

「もし。ばらさん。しばらく、お宿をかしてください。この雨で、こまってゐます。」

赤いばらはいひました。

「白いかたと、きいろいかたとには、かされません。しかし、赤いかたはわたくしと同じ色



ですから、かしてあげませう。」

赤いちょーちょはいひました。

「いえ。いえ。弟をぬれさせておいて、どうして、わたくしばかり、らくができませう。しかたがありません。ほかのお花にたのんでみます。」

雨は、だんだん、ひどくなってきました。ちょーちょ

は、また、つれだって、白いばらのうちをたづねました。そして、いひました。

「もし。ばらさん。しばらく、お宿を貸してください。この雨で、こまってゐます。」

白いばらはいひました。

「赤いかたと、きいろいかたとには、貸されません。しかし、白いかたはわたくしと同じ色ですから、貸してあげませう。」

白いちょーちょはいひました。

「いえ。いえ。にいさんや弟をぬれきせておいて、どうして、わたくしばかり、らくができませう。ぬれきせるくらゐなら、いっしょに、ぬれます。」

かう、いって、また、とんで行きました。

お日様は、これをお聞きになって、「さて。さて。かんしんなきょーだいだ。なかのよいきょーだいだ。」とおっしゃって、にはかに、雨をはらしてくださいました。そして、もとのよーに、よい天氣にしてく

だきいました。

ちょーちょは、喜んで、おもしろく、遊びました。花から花へ、ひらひらと、まひました。

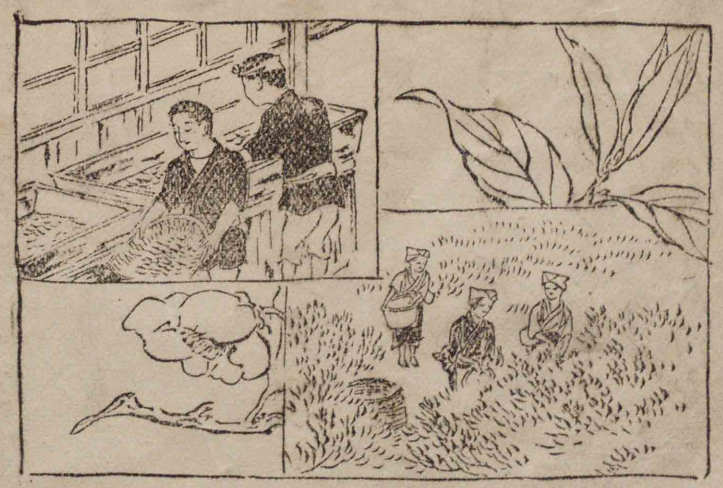
第五　茶。

茶ハ、茶ノ木ノ葉ヨリ、製(セイ)ス。茶ノ木ハ、多ク、暖ナル國ニ成長シ、ソノ高サ五六尺ニスギズ。葉ハ、年中、青ク、秋ニナリテ、白キ花ヲヒラク。

茶ヲ製(セイ)スルニハ、五月ゴロ、新芽(シンノ)ヲツミトリテ、セイロートイフモノニテ、ムシ、次ニ、ホイロト

イフモノニカケテ、モミナガラ、カワカスナリ。カクテ、ソノ葉ノ、ジューブン、カワキタルトキ、取リ出シテ、カメ、マタハ、カンニ入レ、空氣ノカヨハヌヨーニシテ、タクハヘオク。コレ、ワレラガ用フル茶ナリ。

茶ハ、ヨキホドニ、用フレバ、氣ヲハラシ、ツカレ



ヲナホスモノニテ、ワレラガ、シゴトニ、アキ、旅ニ、ツカレタル時ナドニハ、用ヒテ、コーノーアルモノナリ。

第六　日本の景色。(一)

おはなの母が、おくのまで、縫物をしてゐました。おはなは、お茶を出して、「おかあさん。お茶をおあがりなさいませ。」といひました。母は、「ありがたう。」といって、飲みました。そして、「もう、縫物もすみましたから、何か、お話をしてあげませう。」

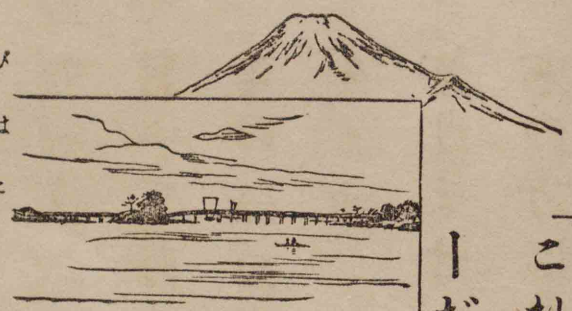
といひました。おはなは、きのふ、父に買ってもらった本をもって來て、「おかあさん。それでは、この本のゑのお話をしてください」といひました。

「おまへはこの山の名を知ってゐますか。」

「それは富士山です。讀本で、讀んだことがあります。」

「それでは、この橋の名は。」

「それは知りません。」



「これは瀬田の唐橋です。昔、たはらとーだといふ人がむかでをいたといふお話のある橋です。橋のむかふに、帆掛船が通ってゐるでせう。あれが、琵琶湖といって、日本で、いちばん、大きな湖です。琵琶湖のまはりには、このほかに、いろいろ、景色のよい所があります。」

「おかあさん。琵琶湖といふのは、どこに、あり

ますか。

「近江の國に、あります。」

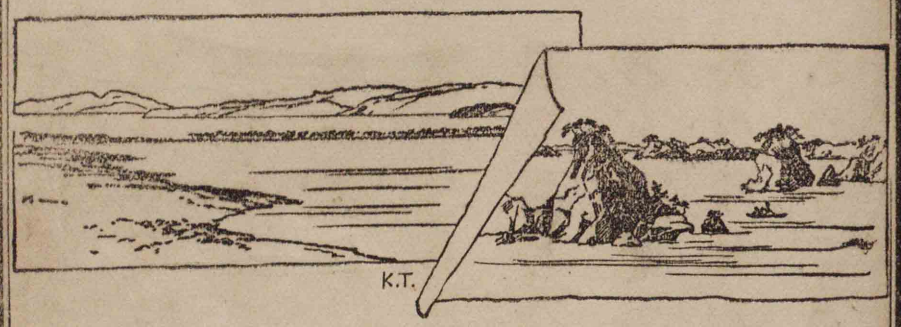
第七　日本の景色。　(二)

母が、一枚、あけると、こんどは、ゑが、三つ、ならべて、書いてあります。

「この、三つのゑは、どこのゑだか、知ってゐますか。」

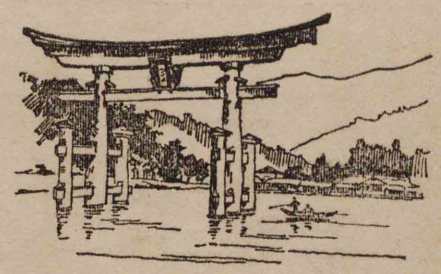
「知りません。」

「右の方にあるのは松島のゑです。松島は、陸



前の國の入海に、あります。枝ぶりのよい松のはえた島が、何百といふほど、ちらばってゐて、たいそー、みごとだといふことです。

まんなかにあるのは天の橋立のゑです。天の橋立は、丹後の國の入海に、あります。松のはえた、白い砂地が、海の中に、つき出て



ゐて、遠方から、見ると、まるで、海に、橋をかけたよーだといふことです。

左の方にあるのは嚴島のゐです。嚴島は、宮島ともいって、安藝の國の、西南の海に、あります。嚴島神社といふお宮が、その島の、北部の岸に、あります。しほがみちると、お宮のゐーかが、海にういてゐるよーに見えて、ちょーど、お話にあるりゅーぐーのよーだといふことです。

この松島と天の橋立と嚴島とを日本の三景といひます。

「おかあさん。日本には、もう、景色のよい所はありませんか。」

「ありますとも。海では、瀬戸内海、山の中では、日光などもよい所です。とりわけ、日光は、湖があったり、瀧があったりして、景色のよい所です。そのうへ、東照宮といって、日本で、いちばん、

りっぱなお宮もあります。それですから、人が『日光を見んうちは、けっこーといふな。』といってゐます。

日本には、まだ、たくさん、よい所があります。西洋人が、『日本は世界の公園だ。』といって、ほめるのもむりはありません。」

母は、かう、話をして、次の歌をもをしへてやりました。

日本の國は海の國。

大島、小島、その中を
通ふ白帆のおもしろや。
岬、入海、そのふちに、
ならぶ松の木おもしろや。」

日本の國は山の國。
大瀧、小川、谷あひに、
おちて、流れて、おもしろや。
お寺、お社、木のあひに
見えて、かくれて、おもしろや。」

第八　公園。

公園とは、いろいろの草木を植ゑなどして、人人をして、じゆーに、遊びたのしましむる所をいふ。わが國の都會には、たいてい、公園あり。そのうち、東京の上野公園、淺草公園、日比谷公園、もっとも、名高し。そのほか、水戸の公園、金澤の公園、岡山の公園なども、また、名高し。

おつるの住める町にも、公園あり。この園はその入口なり。おつるとおふみとは、今、立札の前

にて、話しをれり。これ、立札に、「草木を折り取るべからず。」と書きてあれば、そのわけについて、話しをれるなり。

この公園の中には、松、杉、梅、櫻などゑ植ゑてあり。また、つきやまもきづきてあり。梅と櫻とは、すでに、若葉となりたれども、つきやまのつつじの花は、今、盛なれば、二人は、これより、中に、入りて、たのしく、

おもしろく、遊ぶなるべし。

あしたは、にちよーびでございますから、お晝から、こーえんに、まゐりたいとぞんじます。あなたもいらっしゃいませんか。このまへ、あなたとごいっしょに、まゐりましたときには、櫻が、きれいに、きいてをりましたが、このごろは、つつじが盛だきうでございま

すから、それを見たいと思ふのでございます。どうぞ、おへんじをくださいませ。

五月十三日　　つる

おふみ様

おきそひくださいまして、まことに、ありがたうございます。わたくしも行って見たいと思ってをりましたところでございます。

母にききましたら、行ってもよいと申しましたから、おともをいたします。

五月十三日　ふみ

おつる様

第九　かはいさうな女の子。

おつるとおふみとが、公園から、歸って來ますと、みちに、とをばかりの女の子が泣いてゐました。

おつる「あなた。なぜ、泣いてゐますか。どうしたのですか。」

女の子「ありがたうございます。わたくしが、今、こを通りますと、子どもが來て、わたくしの杖を取ってしまひました。わたくしは目が見えません。さがしても、わかりません。」

二人が、よく、見ますと、いかにも、めくらの子でした。

おふみ「まー。なんといふ、わるい子どもでせう。」

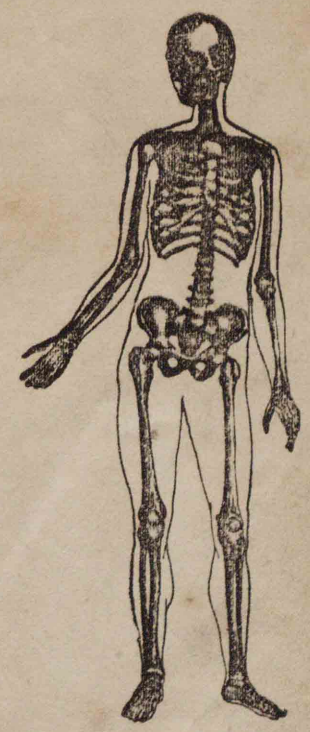
女の子「こんなことは、たびたび、ございます。私は、目が見えんのが、かなしうございます。私は、學校に、行って、字を讀むこともできません。花がさいても、見ることもできません。」

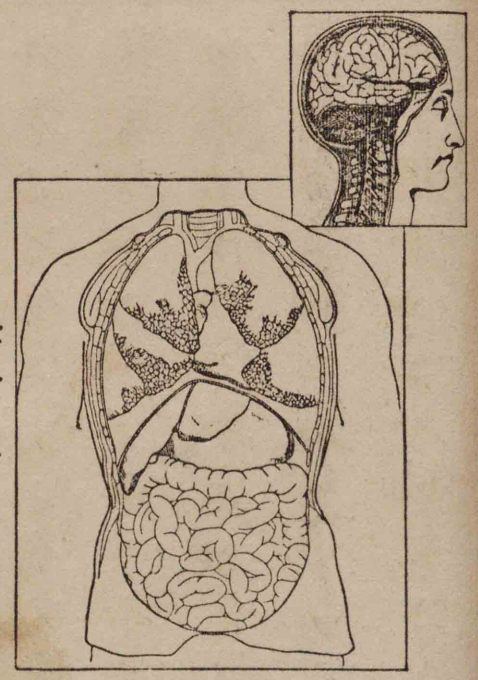
二人(ふたり)は、たいそー、かはいきうに、思ひました。まだ、じぶんたちが、まんぞくなからだをもってゐて、學校に行ったり、公園(こーえん)に行って、遊んだりすることができるのを、しあはせに、思ひました。二人(ふたり)は、杖をきがしてやって、うちまで、おくりとどけてやりました。この子の父や母は、たいそー、喜んで、いろいろ、お礼をいひました。

第十　人ノカラダ。

人ノカラダノソトヲ包ンデヰルモノハ皮(カハ)デアル。皮ハ、チョード、家ノカベノヨーナモノデ、ウチニアル、イロイロナ道具(ドーグ)ヲ守ルモノデアル。皮ノ下ニハ、筋肉(キンニク)ガアル。筋肉(キンニク)ハ骨(ホネ)ニツイテヰテ、ソノノビチヂミデ、カラダノ、イロイロナウンドーガデキルモノデアル。

カラダノ胴ノシンニハ、脊骨ガトホッテヰル。マタ、手ト足トノシンニモ、ソレゾレ、骨ガトホッテヰル。骨ハ、家ノ柱ガ家ノカタチヲタモツヨーニ、カラダノカタチヲタモツモノデアル。カラダノ内ニハ、三ツノヘヤガアル。第一ノヘヤハ頭デ、中ニハ、脳髄トイフモノガハイッテヰ





ル。脳髄ハモノヲオボエタリ、モノノワケヲカンガヘタリスルモノデアル。コレハ、ヨホド、ダイジナモノデアルカラ、頭蓋骨トイフ骨ガ、ヘヤノカベニナッテヰテ、ダイジニ、ソレヲ守ッテヰル。

第二ノヘヤハ胸デ、胸ノ内ノ右ト左トニハ、肺臓、肺臓ノ間ニハ、心臓ガハイッテヰル。肺臓ハ、口

空氣
血

ヤ鼻カラ、スヒ入レタ空氣デ、血ヲキレイニシ、心臟ハ、肺臟カラクル、キレイナ血ヲ、カラダジューニ、メグラセル。コノ心臟ト肺臟トハ、マタ、ヨホド、ダイジナモノデアルカラ、ヘヤノカベハ、タクサンノ、肋骨トイフ骨デ、デキテヰル。第三ノヘヤハ腹デ、マク一枚デ、胸ト、シキッテアル。腹ノ中ニハ、胃ガハイッテヰテ、ソノ下ニハ、腸トイフ、長イモノガ、マガッテ、カサナリアッテ、ハイッテヰル。胃ハ、口デ、タベタモノヲコナシテ、腸ニ、

養
運動

オクル。腸ハ、胃デ、コナレンモノヲコナシ、コレヲ、胃デ、コナレタモノトマゼテ、ソレカラ、養ニナルモノヲ取ッテ、ソノヘンヲメグッテヰル血ニマゼル。

人ノカラダハ、マヅ、コンナシカケデアル。コレヲジョーブニスルニハ、養ニナルモノヲタベルコトト、運動スルコトトガ、イチバン、ダイジデアル。

第十一　煙草と酒。

聲

ある日曜日、次郎が、父につれられて、町を通りたるに、顔の赤き人、大聲に、歌を歌ひ、右へ、左へ、よろめきながら、そばをすぎたり。

次郎は父の袂をひきて、

「おとうさん。今の人はきちがひでせうか」。

と問ひたり。

父は、

「いーえ。きちがひではありません。酒を飲んだのです。酒には、あるこーるといって、人をゑ

問酒

弱町

はせるものがはいってゐますから、よけいに、飲むと、今の人のよーになります。また、からだも弱くなります」。

とこたへたり。

かくて、一町ばかり、行きたるに、交番所の前にて、ひとりの子ども、巡査に、しかられゐたり。

次郎は、また、父の袂をひきて、

「あの人は、なぜ、しかられてゐるのでせうか」。

と問ひたり。

父は、

「煙草をすったから、しかられてゐるのです。煙草には、どくなものがはいってゐますから、すふと、からだがわるくなります。とりわけ、年のわかいものには、たいそー、がいがありますから、『はたちまへのものはすってはならん。』と、法律で、とめてあるのです。」

と答へたり。

第十二　石と豆。

畑のすみに、一つの石と一つぶの豆とがならんでゐた。

豆は、小さな聲で、

「どれ。これから、そだつよーいをしよう」。

といった。石は、ふしぎに思って、

「そだつとは、いったい、なんのことだ」。

といった。

豆は、

「おや。君は、まだ、そだつといふことを知らん

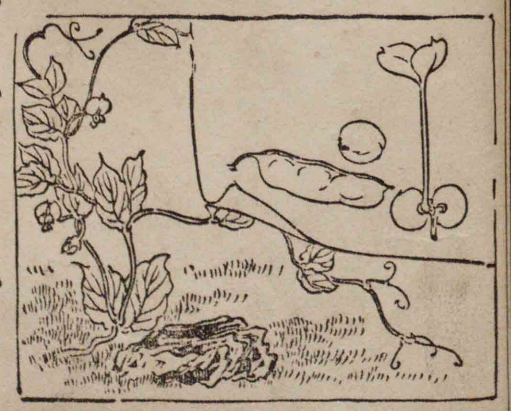
のか。いまに、ぼくがそだつから、見てゐたまへ。根は、『しめりをとらう。』と思って、土にはいるよ。葉や莖は『空氣をすったり、日の光にあたったりしよう。』と思って、上に、のびるよ。しめり、空氣、日の光はぼくのたべものさ。ぼくは、しめり、空氣、日の光をたべて、だんだん、だんだん、まんぞくな植物になるよ。根はひろがる。莖からは、枝が出て、花がさく。おしまひには、今のぼくのよーなみがはいってゐる莢がなる。

あー。早く、その時が來ればよいなー」。

といった。

そこで、石はふしぎに思って、

「君は、じつに、ふしぎなことをいふねー。ぼくは、もう、何十年も、ここに、ゐるよ。しかし、ぼくは、ちっとも、そだったことはない。また、ぼくには、根もない。莖もない。あるのかも知らんが、土にもはいらんし、上にも、のび



ん。君。それはうそではないか。」

といった。

こんな話をしてゐるうちに、豆は、まんなかから、二つに、われた。根が出た。芽が出た。芽は、のびて、莖となった。そして、だんだんと、豆がいったとほりになった。

石は、はじめて、そだつといふことを知った。また、「じぶんはそだつものでない。」といふことをも知った。

第十三　鳥ノ巣。

アル所ニ、多クノ木ニテトリマカレタル小サキ村アリケリ。ソノ木ノ中ニハ、春、キレイナル花ノサクモアリ、秋、味ヨキミノナルモアリケリ。マタ、アル木ニハ、美シキ多クノ鳥、巣ヲカケテ、サモ、タノシゲニ、ナキケリ。

コノ村ノ人ハ、ツネニ、子ドモラニ、

「オマヘタチハ、鳥ヲイヂメテハナリマセン。巣ヲ取ッテモナリマセン。イヂメタリ、取ッタリ

スルト、春ニナッテモ、花ガサキマセン。秋ニナッテモ、ミガナリマセン。」

トイヒキカセタリ。

シカルニ、一人ノ、アシキ子ドモアリテ、木ニ、ノボリテ、コトゴトク、ソノ巣ヲトリタリ。鳥ハ、大イニ、オソレテ、ミナ、ウチツレテ、ニゲサレリ。コレヨリ、庭ニモ、野ニモ、鳥ナカズシテ、村ハ、ハナハダ、サビシキ所トナレリ。

ソレノミナラズ。鳥ノニゲサリタルヨリ、木ニ、

毛虫、シダイニ、フエキテ、芽ヲ食ヒ、葉ヲ食ヒ、ツヒニハ、枯木ノゴトクニ、ナセリ。

カノ、アシキ子ドモハ、「コノ秋ハ、ジュートブンニ、ミヲ食ハン。」ト思ヒタリシガ、カカルアリサマニナリタレバ、ソレモ食フコトアタハザルニイタレリ。

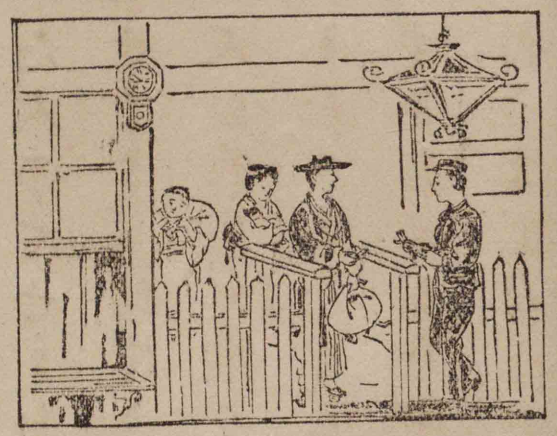
第十四　停車場。

人が、おほぜい、停車場の方へ、行きます。あれは八時の汽車に乘るのでせう。汽車は、きまった

時間が來ると、すぐ、出ます。一分でも、まつことはありません。

停車場の中では、人が切符を買つてゐます。後から、來た人は、ときに、來た人の後について、じゅんじゅんに、買つてゐます。また、荷物をあづけてゐる人もあります。あれは、えんぽーへ、行く人でせう。

驛夫がべるをならしました。人が、切符をきつてもらつて、乘場に出ました。まもなく、汽車が見え



てきました。まつときに、煙をはいて、來るのは機關車です。機關車は、蒸氣の力で、後の車をひくものです。機關車の次に、たくさん、ついてゐるのは客車です。客車は人を乘せるものです。客車の後についてゐるのは貨車です。貨車は荷物を乘せるものです。

汽車が着きました。客車から、人がおります。お

りてから、ほかの人が乘ります。わかいものがとしよりや子どものせわをして、乘せてゐます。貨車から、荷物をおろします。あれは、今、おりた人のでせう。おろしてから、ほかの荷物をのせます。あれは、ききに、あづけた人のでせう。人は客車に乘りました。驛夫は荷物をのせました。まもなく、八時になりました。驛長があひずをしました。汽笛が、ぴーと、なって、汽車が出て行きました。

旅行をする人。　みおくりする人。
今、着く人を　むかへに、出た人。
べんとー賣るのは　はっぴを着た人。
手荷物かついで、運ぶは赤帽。

がらんがらんと、べるがなる。
煙をはいて、汽車が來る。」

驛の名呼ぶ聲。　とびらのあく音。
おりくる人人。　乘りこむ人人。
あひたる喜。　わかるるかなしみ。

あいさつさまざま、　ことばも短く。

やがて、汽車さり、人ちりて、

あとを、驛夫が、掃除する」。

第十五　貿易。

世界ノ中ニハ、多クノ國アリテ、海ニソヘル國モアリ、山ニカコマレタル國モアリ。マタ、暖ニシテ、年中、草木ノシゲレル國モアリ、寒クシテ、雪ノキユル時ナキ國モアリ。

サレバ、コレラノ國ヨリ出ヅル産物モ、マタ、同

ジカラズ。ワガ國ノゴトク、米、生糸、茶ヲ産スル國モアリ、イギリスノゴトク、鐵、石炭ヲ産スル國モアリ。ソノホカ、海ノ産物アリテ、山ノ産物ナキ國モアリ。マタ、暖キ土地ニハ、暖キ土地ノ産物アリ、寒キ土地ニハ、寒キ土地ノ産物アリ」。

サレバ、オノオノ、ソノ産物ヲ賣買シテ、タガヒニ、有ルモノト、無キモノトヲトリカフルコトハ、ハナハダ、必要ナルコトナリ。カク、國ト國トノ間ニ、賣買スルヲ貿易トイフ。

富　貧　家　港

貿易盛ナレバ、ソノ國富ミ、貿易オトロフレバ、ソノ國貧シ。サレバ、國民タルモノハ、オノオノ、家業ヲハゲミテ、多クノ産物ヲ出シ、マスマス、貿易ヲ盛ナラシメンコトヲツトムベシ。

第十六　開港場。

開港場トハ貿易ヲナス港ニシテ、内國ノ産物ヲ輸出シ、外國ノ産物ヲ輸入スル所ナリ。ワガ國ニハ、開港場、四十アマリ、アリ。ソノウチ、オモナルモノハ横濱、神戸、大坂、長崎、函館ナドナリ。

店　深　船

横濱ハ、東京ノ西南、八里バカリノ所ニ、アリ。開港ノハジメマデハ、サビシキ、リョーシノ村ナリシガ、今ハ、大イナル商店タチナラビテ、貿易、モットモ、盛ナリ。

神戸ハ、大坂ノ西、十里バカリノ所ニ、アリ。港ノ内、水深クシテ、大イナル船ヲトムルニ、便利ナレバ、船ノ出入、ハナハダ、多シ。

大坂ノコトハ、スデニ、ノベタリ。サレバ、ココニハ、ノベズ。

西北部　南　開

長崎ハ、九州ノ西北部ニ、アリ。昔ヨリ、貿易ヲナセル所ニシテ、船ノ出入、今、ナホ、ハナハダ、多シ。函館ハ、北海道ノ西南部ニ、アリ。北海道ノ産物、多クハ、ココニ、アツマリ、市中、大イニ、ニギハヘリ。

コノホカ、下關ト門司トモ、マタ、名高キ開港場ニシテ、トモニ、瀬戸内海ノ西ノ入口ニ、アリ。ソノウチ、下關ハ、明治二十七八年戰役ノトキ、清國ノ使ト、ワガ國ノ大臣トガ媾和ノ談判ヲ開

待　受

キシ所ナレバ、ソノ名、コトニ、高シ。

第十七　神戸からの電報。

洋吉の家は、横濱に、ある。父は日本丸といふ汽船の船長で、先月、支那へむかって、たって行った。洋吉は、「もう、お歸りになるであらう」と、まいにち、まいにち、待ってゐた。母も待ってゐた。

ある日、げんかんで、「電報」といふ聲がした。洋吉は、すぐ、出て行って、電報を受け取った。見ると、おもてには、「ヨコハマ、、、、、ハルノヨーキチ」と、書

いてあって、うらには、「ミチスケ」と、書いてあった。

洋吉は喜んで、

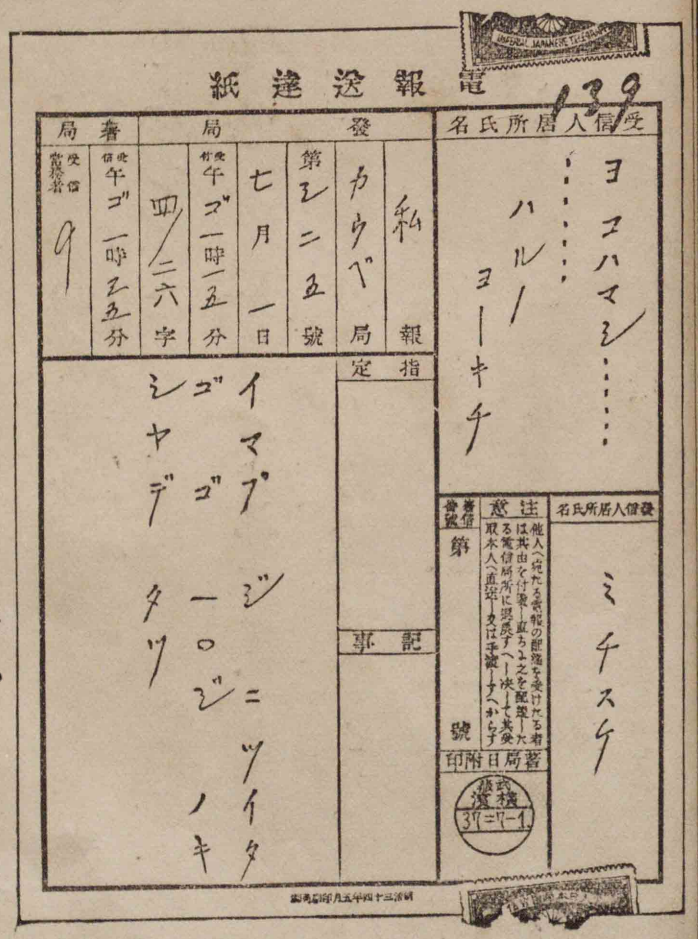
「おかあさん。おとうさんから、電報が來ました。」

といって、母のところへ、持って行った。

母も喜んで、受け取って、すぐ、封をあけた。中には、次のよーに、書いてあった。

母は、たいそー、喜んで、

「洋吉。これをごらん。おとうさんは、いよいよ、


電報送達紙

受信人居所氏名
ヨコハマシ……
……ハル
ヨーキチ

發局
私報
カウベ局
第三二五號
七月一日
午後一時五分
四/二六字

著局
午後一時五五分
受信
9

指定

イマブジニツイタ
ゴゴ一〇ジノキ
シヤデタツ

事記

發信人居所氏名
ミチスケ

著信番號
第
號

注意
他人（此たる電報の部瑞を受けたる者は其由を付し直ちに之を配達し又は電信所に返戻すへし）決して其發取人（直接に手渡すへからず）

著局
日附印
武藏
渡橋
31.7.1

明治三十四年五月印刷第壹號

よく、わからなかったので、

「『イマブジニツイタ』と、あるのは、いつ、どこに、あした、お歸りになりますよ。」

といった。

しかし、洋吉は、

お着きなされたのですか。また、午後十時の汽車で、おたちになると、いつ、うちに、お歸りになるのですか。」

とたづねた。

母は、電報を取って見せて、

「この上のだんの四行めと五行めとをごらん。『七月一日『午ゴ一時一五分』と、書いてありませう。これが、おとうさんがこの電報をおかけになった日と時間とです。それから、この

二行めをごらん。『カウベ』と書いてありませう。ここが、おとうさんがこの電報をおかけになった所です。それですから、おとうさんは、けふ、一時ごろに、神戸にお着きになったのでせう。」

と敎へた。そして、机の上から、汽車の時間表を持って來て、あけて見て、

「おとうさんが神戸を、午後十時に、おたちになると、十一時ごろには、大坂、十二時ごろに

は、京都、あしたの午前五時三十分ごろには、名古屋、十二時ごろには、静岡にお着きになります。そして、横濱には、午後六時ごろに、お帰りになるのです。」

と教へた。

洋吉は、これを聞いて、

「それでは、いよいよ、あしたの六時ごろに、お帰りになりますね。」

といって、たいそー、喜んだ。そして、電報は、早く、

つくもので、文は短くても、よく、わかることと、汽車の時間がきまってゐて、たいそー、つごーのよいものであることに、おどろいた。

第十八　航海の話。(一)

洋吉の父は、七月二日の午後六時ごろ、帰って來た。洋吉は、たいそー、喜んだ。母も喜んだ。やがて、あいさつもすみ、ごはんもすんで、ばんには、父が、いろいろ、おもしろい話をした。

父は、次の日、町はづれの小學校に、行った。先生は、

たいそー、喜んで、「生徒に、何か、お話をしてやってください。」と願った。父は「それでは。」といって、生徒に次のよーな話をしてやった。

「みなさん。私は子どもの時に、この學校へ、通ってゐました。みなさんと同じよーに、あそこの庭で、まりをなげたり、ここのこーどーで、修身のお話を聞いたりしてゐました。それで、私は、この學校が、たいそー、なつかしうございます。みなさんもなつかしうございます。

なつかしいので、けふ、來てみましたところが、『みなさんに、何か、お話をしてあげてくれ。』といふ先生のおたのみがございました。べつだん、おもしろいお話もありませんが、私は日本丸といふ汽船の船長をしてゐますから、ひとつ、航海のお話をいたしませう。

みなさんは、海を知ってゐらっしゃる。汽船も、軍艦も知ってゐらっしゃる。航海といふのは、その

汽船や軍艦などに乗って、その海をわたって行くことです。そして、この航海のうちには、いろいろ、おもしろいことがあります。

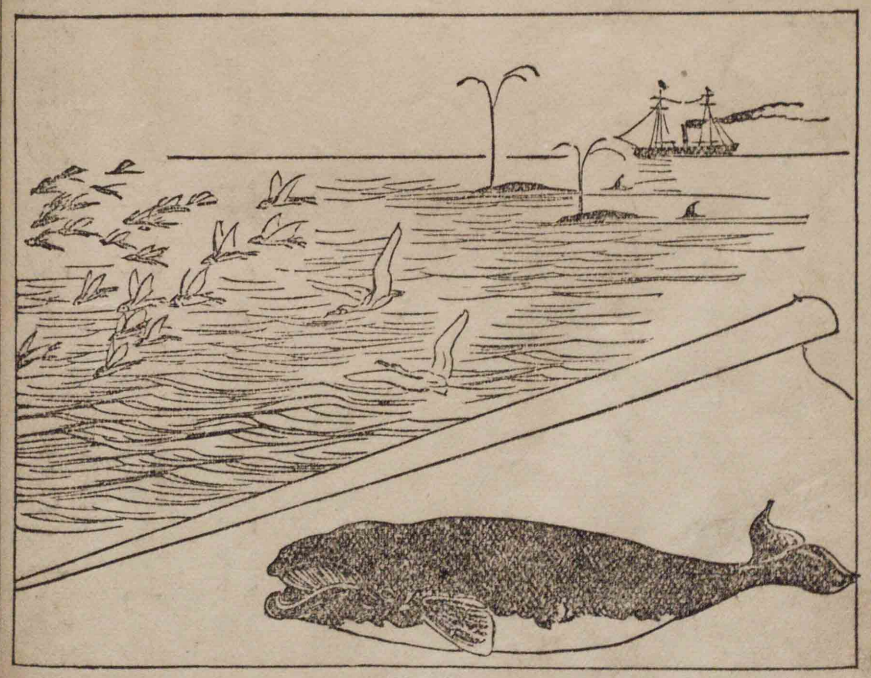
まづ、いかりをまいて、港を出て行くと、帆掛船のはしってゐるのが見える。白い鳥が、あっちこっちで、とんでゐるのが見える。海ばたには、松のならんでゐるのが見える。

それから、だんだん、沖の方へ、進んで行くと、もう、目に見えるものは水ばかりで、その水

ばかりの中を、船が、どんどんと、波をきって行くのです。日の出、日の入には、光が波にうつって、海が、まるで、金のよーになる。月夜には、銀のよーになる。その美しいことといったら、何とも、いひよーがありません。

また、鯨といふ大きな、魚の形をしてゐるけもの、十何間もある、大きなけものが、頭から、高く、すいきをふいてゐることがあります。とびの魚といふ魚が、雲のよーに、むらがっ

て、とんでゐることもあります。あほー鳥といふ大きな鳥がそれをおってゐることもあります。それから、いよいよ、外國の港に着くと、めづらしい家がたっ



てゐる。めづらしい草木がはえてゐる。かはったふーをして、かはったことばをつかふ人がゐる。いや、もう、航海ほどおもしろいものは、またと、ありません」。

第十九　航海の話。（二）

洋吉の父は、こっぷの水を飲んで、話をつづけた。

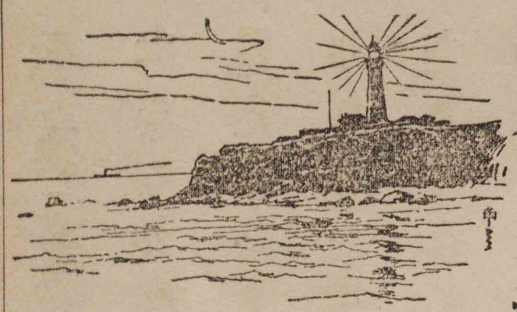
「しかし、航海する間には、大風のふくことがある。霧がかかったり、大雨、大雪が降ったりして、一寸きも見えないよーになることもあ

る。

大風がふくと、山のよーな波がよせて來て、『船は、今にも、沈むか。』と思はれるよーになる。けれども、船は、なかなか、沈まない。どんどんと、この山のよーな波をきって行く。それですから、どきょーをすゑてきへをれば、よいのです。なにも、おそろしいことはありません。ただ、おそろしいのは霧がかかったり、大雨、大雪などが降って、一寸きも見えないよーに

なることです。

これが、夜の暗いので、ききが見えないのなら、なにも、おそろしいことはありません。星を見ても、船が、どこに、をるか、わかるし、また、



燈臺といふものがあって、その光るよーすなどで、『あれはどこの燈臺だ。』といふこともわかります。

けれども、霧がかかったり、大雨、大

雪などが降ったりして、ききが見えないよーになると、晝は、もとより、夜でも、星も、燈臺もみえないよーになります。そして、淺瀨にのりあげたり、あんしょーやほかの船にぶつかったりするよーな、あぶないことがあるから、おそろしいのです。

しかし、そんなときには、淺瀨にのりあげたり、あんしょーにぶつかったりしないために、船をとめてしまひます。そして、ほかの船にも

ぶつからないために、汽笛や鐘をならして、霧のはれるのや、大雨、大雪のやむのを待ちます。さうすると、なにも、あぶないことはありません。ですから、おそろしいといっても、まー、安心です。

きて、おしまひに、ひとつ、いっておくことがあります。それは、『日本は海國でありながら、人が、わりあひに、海をおそれる。』といふことです。ごらんなさい。ちょっと、渡舟に乘ってきへ、『こは

いよ。こはいよ。』といって、泣くものがあるではありませんか。こんなことでは、しかたがありますまい。

みなさんの中には、大きくなって、航海をする人もありませう。貿易をする人もありませう。漁業をする人もありませう。かよーなしごとをする人はいふまでもないことですが、たとひ、農業をする人でも、工業をする人でも、小さいときから、海になれておくといふことは、よほど、必要なことだと思ひます。」

第二十　燈臺。

空に、月なく、星きへなくて、
一寸ききすら　見えざる夜に、
沖の汽船や　軍艦などは、
なにをめあてに、　航路をきむる。
岸に、岬に、　燈臺ありて、
遠く、沖まで、　光りてあれば、
沖の汽船や、　軍艦などは、

それをめあてに、航路をきむる。」
きめし航路を進みて行けば、
淺瀨暗礁、數ある海も、
さはることなく、渡るをうべし。
あー。燈臺の貴きことよ。」

第二十一　琉球。

琉球ハ九州ノ西南ニツラナレル、五十アマリノ島島ヨリナレリ。ソノウチ、沖繩島、モットモ、大ナリ。

沖繩島ニハ、二ツノ、オモナル都會アリ。ソノ一ツヲ首里トイヒテ、昔、琉球ノ島主ノヲリシ所ナリ。他ノ一ツヲ那覇トイヒテ、今、沖繩縣廳ノアル所ナリ。

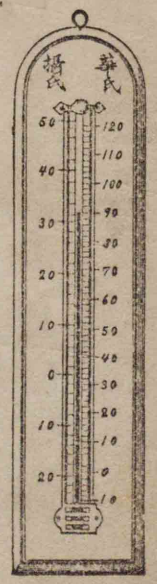
氣候ハ、ハナハダ、暖ニシテ、冬、スラ、雪ノ降ルコトナク、草木、ツネニ、葉ヲツケタリ。一二月ノコロニハ、スデニ、櫻ノ花サキ、農夫苗ヲ植ヱハジム。サレバ、人人、年中、ヒトヘモノヲ用ヒテ、綿入ナドヲ用フルコトナシ。

琉球ニハ、水少ケレバ、米ヲ産スルコト少シ。サレド、サツマイモハ、一年ニ、二度、取入ル。人人ノ、ツネニ、食フモノハ、タイテイ、コレナリ。マタ、砂糖、カスリ、ヰムシロ、豚ナドヲモ産ス。

第二十二　寒暖計。

寒暖計ハ氣候ノ暑イ寒イヲ計ル機械デ、ガラスノクダニ水銀カ、色ヲツケタアルコールカヲ入レテ、コレニ、度ガモッテアルモノデアリマス。

タイテイ、物ハ、ドンナ物デモ、アタタマルト、カサガフエ、冷エルト、カサガヘルモノデアリマス。



水銀モ、アルコールモ、ガラスモ、ミンナ、サウデアリマス。シカシ、フエルトヘルトノドアヒハ、物ニヨッテ、チガッテヰテ、水銀ヤアルコールナドハ、ガラスヨリハ、ソノドアヒガ、ズット、多ウゴザイマス。

ソレデ、前ニイッタヨーニ、作ッテオキマスト、水銀

ヤアルコールハ、氣候ノ暑イ寒イニヨッテ、アガッタリ、サガッタリシマス。コノアガッタリ、サガッタリシタノヲ、度ニアハセテ、見ルト、ドノクラヰ、暑イカ、ドノクラヰ、寒イカガワカリマス。

寒暖計ノ度ノモリヨーニハ、華氏ト攝氏ト列氏トノ三トホリアリマス。私ドモガ、フツー、ツカッテヰルノハ、華氏デアリマス。

だいぶん、すずしくなりました。

どなたさまも、おかはりはござ

いませんか。お伺ひ申します。わたくしのうちでは、みんな、たっしゃで、をりますから、御安心くだきいませ。父から、ききますれば、おとなりの町では、わるい病氣がはやってをるといふことですが、きぞ、御しんぱいでございませう。どうぞ、御用心なきいませ。

十月三日　うめ

おしげ様

お手紙をいただきまして、ありがたうございます。どなたも、御きげんよく、いらっしゃいますきうで、まことに、けっこーにぞんじます。私の方でも、みんな、かはりがありませんから、どうぞ、御安心下きいませ。となりの町のはやりやまひは、いちじは、ずいぶん、

ひどくて、しんぱいいたしましたが、このごろは、だんだん、おとろへてまゐりました。しかし、仰のとほり、じゅーぶん、用心するつもりでございます。

十月四日　しげ

おうめ様

○おかはりはございませんか。お伺ひ申します。御かはりございなく候や。御伺ひ申上候。

度

存

晴

算術

石、斗、升、合

○みんな、たっしゃでをります。みな、たっしゃに候間、御安心下きれ度候。

○ありがたうございます。ありがたく存候。

第二十三　小太郎の日記。

十月八日、木曜日、晴。

けふ、學校で、算術の時間に、米や油などをはかる、石、斗、升、合などといふ枡目のとなへかたと、そのけいきんのしかたとをならった。

學校がひけてから、おとうさんと、となりの町

曇

記壹錢也

の油屋に、行って、石油をあつらへた。油屋は「あしたのひるすぎに、持たせてあげます。」といった。油屋からの歸に、鉛筆と手帳とを買ってもらった。

十月九日、金曜日、曇。

午後三時ごろ、となりの町の油屋から、きのふ、あつらへた石油を持って來た。それに、次のよーな送り狀がそへてあった。

記

一石油壹かん　代金壹圓八拾錢也

注文者殿

右御注文の品御とどけ申上候間御受取下きれ度候也

代金はこの者に御渡し下きれ度候

明治三十七年十月九日

齋藤兵右衛門殿　田中油商店

ぼくはその送り状を、おとうきんの所へ、持って行った。おとうきんは、すぐに、錢をはらっておやりなきれた。使は次のよーな受取をおいていった。

證正分

證

一金壹圓八拾錢也　石油壹かん代

右正に受取候也

明治三十七年十月九日

齋藤兵右衛門殿　田中油商店

十月十日、土曜日、晴。

けふ、學校で、身體檢査があった。ぼくのせいの高きは四尺一寸二分あって、目方は六貫八百匁あった。

學校からの歸に、人が稻をかってゐるのを見た。歸ってから、おとうさんにお話したら、「うちでも、あしたから、かりはじめるつもりだ。」とおっしゃった。ぼくも、あしたは日曜日だから、ぼくのできることだけは、おてつだひするつもりだ。

をはり。

明治三十六年九月二十二日印刷
明治三十六年九月二十五日發行
明治三十七年一月十五日翻刻印刷
明治三十七年一月十八日翻刻發行

著作權所有

著作兼發行者　文部省
翻刻發行者　大橋新太郎　東京市日本橋區本町三丁目八番地
印刷者　大橋光吉　東京市小石川區久堅町百八番地
印刷所　合資會社博進社　東京市小石川區久堅町百八番地

尋常小學讀本七
定價金八錢

明治三十七年一月十二日
文部省檢査濟

發行所　東京市日本橋區新右衛門町拾六番地
日本書籍株式會社